

Sarvatathāgatatattvasaṃgraha の説く āveśa 儀礼

— 金剛界大マンドラ章「成就が生じるための印に関する智」

校訂テキストおよび和訳注 —

種村隆元

1 はじめに

周知の通り *Sarvatathāgatatattvasaṃgraha* (『真実摂経』あるいは『初会金剛頂経』。以下 STTS と略称) は、インド中期密教を代表する經典であり、日本密教における所依の經典として重要な位置を占めている。また、インド密教においてはヨーガタントラ *Yogatantra* の主要經典と見なされており、中期以降の密教の発展に関して重要な位置を占めている。

加えて、ヒンドゥー教のタントラ、特にシヴァ教との関係においても、STTS が重要な位置を占めていることが指摘されている。タントラ研究の碩学であるアレクシス・サンダーソン Alexis Sanderson は、STTS がシャクタ的シヴァ教の影響が見られる最初の經典であることを指摘しており、それを特徴付けるものの一つとしてアーヴェーシャ (āveśa, 憑依) を挙げている (SANDERSON 2009: 132ff.).

筆者は最近 STTS に見られるアーヴェーシャについて若干の検討を行い、儀礼実践の場において焼香 (dhūpa) と鈴 (ghaṇṭā) がアーヴェーシャを引き起こす際に用いられたこと、アーヴェーシャとは実践者あるいは対象者の心臓に「金剛の智」、すなわち仏の智が宿ることを中核としていることを指摘した (種村 2019)。本論文の目的は STTS におけるアーヴェーシャの包括的研究の基礎資料として、STTS 第 1 儀軌「大乘現証 (Mahāyānābhisamaya)」, すなわち金剛界品の第 1 章「金剛界大マンドラ」のうち、「成就が生じるための印に関する智」と筆者が名づけるセクションのサンスクリット語校訂テキ

ストおよび和訳注を提示することである¹。

テキストおよび和訳を提示する前に、今回取り扱うセクションが「金剛界大マンドラ」章において、どのような位置にあるかを確認していきたい。

2 第1儀軌第1章「金剛界大マンドラ」のシノプシス

「金剛界大マンドラ」章のシノプシスは以下の通りである。

1. 序分
- 1.1. 通序
- 1.2. 別序
2. 瞑想実践（アーヴェーシャによるマンドラとの合一）
- 2.1. 最初の合一（Ādiyoga）
- 2.2. 最も勝れたマンドラの王（Maṇḍalarājāgrī）
- 2.3. 最も勝れた行為の王（Karmarājāgrī）
- 2.4. 百八名讃
3. 灌頂（入門候補者にアーヴェーシャを生じさせる）
4. 成就が生じるための印に関する智（アーヴェーシャの諸実践への適用）
- 4.1. 四種類の成就が生じるための印に関する智
- 4.1.1. 財宝の成就が生じるための印に関する智
- 4.1.2. 金剛神通の成就が生じるための印に関する智
- 4.1.3. 金剛持明者の成就が生じるための印に関する智
- 4.1.4. すべての如来の最上の成就が生じるための印に関する智
- 4.2. 秘密の印および成就法
5. 四種類の印（アーヴェーシャの引き起こし方）

¹ このうち STTS 236, 238 は梶尾 1982: 153–168 において言及されている。

- 5.1. 大印
- 5.2. 誓戒印 (三昧耶印)
- 5.3. 法印
- 5.4. 羯磨印 (行為を表す印)
- 5.5. 四種類の印に共通した規則
6. 補足規定

このシノプシスは堀内寛仁校訂本のシノプシス (目次) をもとに作成したものである (内容は簡略化している)。また、堀内校訂本に基づいてはいるものの、堀内校訂本のそれとは若干構成が異なる。相違する点は「百八名讃 (2.4)」と「四種類の印に共通した規則 (5.5)」である。堀内校訂本では、百八名讃は灌頂の冒頭部として取り扱われている。アーナンダガルバ *Ānandagarbha* による金剛界大マンドラ儀軌である『サルヴァヴァジローダヤー *Sarvavajrodayā*』に規定されている三三昧では、「最も勝れた行為の王」の後の終結部の儀礼において、実践者自身—この時点においてマンドラの中尊と合一している—を百八名讃で讃える規定が見られることによる²。しかしながら、STTS 自体に明確な区分が見られる訳ではないので、これはあくまでも筆者自身の解釈である。次に、「四種類の印に共通した規則」に関しては、全体の補足規定というよりも、むしろ四種類の印に共通した補足規定であると解釈した次第である。

上記のシノプシスで示しているように、「金剛界大マンドラ」は内容的にみて、「瞑想実践」「灌頂」「成就が生じるための印に関する智」「四種類の印の規定 (いわゆる大三法羯磨の印)」「補足規定」に分けることができ、これに経典全体の序分 (*nidāna*) が加わる構成になっている。今この構成をアーヴェーシャを視点にして見てみると、「瞑想実践 (いわゆる三三昧)」はアーヴェーシャを引き起こし、マンドラとの合一を果たす実践、「灌頂」は入門候補

² *Sarvavajrodayā* MSK1 §15. ここでは、*Vajrasattva* と合一した実践者は、金剛集会 (*vajrasamāja*) の印を結び、百八名讃を唱える。

者にアーヴェーシャを引き起こし、「質的な転換」をもたらす儀礼、「成就が生じるための印に関する智」はアーヴェーシャを諸実践へ適用する方法 (内容としては現世利益的なマジカルなもの)、「四種類の印」は実践者がどのようにアーヴェーシャを引き起こすかを規定しているとみることができる。今回テキストおよび和訳を提示するのは、上記シノプシスにおけるセクション 4 である³。

アーヴェーシャを視点として上記のシノプシスを見た場合、途中に「成就が生じるための印に関する智」というセクションが挟まるものの、「灌頂」→「四種類の印」という順序は実践面から大きな意味をもってくる。現在、唯一サンスクリット語原典の存在が確認される金剛界大マンダラ儀軌である、『サルヴァヴァジローダヤー』に規定されている瞑想実践においては、三三昧の最初の段階である「最初の合一」のハイライトである五相成身観の前に、自加持・四種類の印による印づけが規定されている。この自加持の内容は、実践者が瞑想の中で自ら化作したマンダラ — 実はこのマンダラの中尊は実践者自身であるが — において一連の灌頂を授かるというものである。そしてこの「自らに対する灌頂」を行ったのち、四種類の印により実践者自身の印づけを行うことで、自らの身体各パーツに諸尊格を憑依させ、いわゆる「身体マンダラ」を完成させるのである⁴。実際の儀軌と比較することで、経典の構成のもつ意味が明らかになってくるのである。

³ STTS と同じく Yogatantra に分類される *Vajraśekhara* にも、本論文で取り扱う箇所と同一あるいは類似の偈頌が見られる (前編第 3 章および後編第 1 章)。またそれが説かれる箇所も STTS と同じく灌頂を説く箇所の後である。

⁴ STTS および関連文献の説く四種類の印については別稿にて論じる予定である。

3 *Sarvatathāgatatattvasaṃgraha* の写本および版本について

3.1 現存写本

ここで STTS サンスクリット語原典の写本および現在までに出版されている版本について述べていきたい。STTS のサンスクリット語原典に関しては、現在 3 本の写本の存在が知られている。すなわちネパールの Kaiser Library 所蔵写本、およびトゥッチ・コレクション (Tucci's Collection) の 2 本である。

Kaiser Library 所蔵写本 (Acc. No. 143) は、1956 年にジョン・ブラフ John Brough およびデヴィッド・スネルグロヴ David Snellgrove により、カイザー・シャムシーア Kaiser Shamseer の写本コレクションの中にその存在が確認されている⁵。ブラフおよびスネルグロヴはカイザー・シャムシーアより当該写本の撮影許可をもらい、その写真の影印版が Śatapiṭaka Series で出版されている⁶。また同じ写真は酒井真典により出版されている⁷。Kaiser Library 所蔵写本は Nepal-German Manuscript Preservation Project (NGMPP)

⁵ SNELLGROVE 1959: part 1, 18, note 3 において簡潔に言及されている。

⁶ 本論文の参考文献一覧の SNELLGROVE and CHANDRA 1981 を参照。

山田一止の STTS 校訂本のイントロダクション (より正確には Abbreviations の Ms の項目) には、山田がスネルグロヴより当該写真 (microfilm) の使用許可を得たこと、その microfilm が全 150 フレームあること、そして 282 ページ (すなわち 282 folio sides) の写本が撮影されていたことを述べている。さらに山田はスネルグロヴの提供した microfilm に収められている写真には 20 ページ分の欠落があり、その欠落がブラフの撮影した写真により補われたことが述べられている。この文面を読む限りでは、スネルグロヴとブラフがそれぞれに別々に写真撮影したことをうかがわせる。スネルグロヴによる影印版のイントロダクションには「two sets of microfilms」を作った旨を記しているが、その microfilm と「ブラフ撮影の写真」の関係については明らかではない。また、Śatapiṭaka Series で出版された写真の影印版では、全 314 ページ分の写真が掲載されており、さらに (少なくとも) 79 頁に掲載されている写真は、筆者が入手したカラー写真には含まれていない。注 9 も参照のこと。

⁷ スネルグロヴは酒井真典がトゥッチ・コレクションの写本を利用して STTS を校訂していることを知り、酒井にマイクロフィルとそれまでスネルグロヴが終えていた校訂作業の写しを送った旨を記している (CHANDRA and SNELLGROVE 1981: 5)。また、酒井による影印版の出版がスネルグロヴの予想するところではなかったことも記されている (CHANDRA and SNELLGROVE 1981: 6)。

によっても写真撮影されている (NGMPP reel no. C14/20). これとは別に、筆者は当該写本のデジタルカラー写真を入手している。

トゥッチ・コレクション (Tucci's Collection) の STTS の写本であるが、これは、前述の Kaisar Library 所蔵本を書写させたもの (apograph) である。フランチェスコ・スフェッラ Francesco Sferra によるカタログでは、「3.7 Paper MSS」の No.38 および No.53 に相当するもので、両方ともに不完全なものである⁸。おそらくは、この2本で1つの「完本」を構成するものと思われる。

3.2 Kaisar Library 所蔵写本について

現存する STTS サンスクリット語写本が Kaisar Library 所蔵写本とその apograph のみであるということは、実質的に Kaisar Library 所蔵写本が唯一の写本であると考えてよい。当該写本は、素材が貝葉で、デジタルカラー写真の冒頭にあるカードカタログによれば、横 25cm、縦 4.5cm の比較的「小型」の写本である。そして両端からそれぞれ全長の約 3 分の 1 の位置に紐を通すための穴がある。1 葉につき 6～9 行でテキストが書写されている。筆者は 2008 年にカトマンドゥで行われた第 1 回 Early Tantra Workshop の一環として当該図書館を訪れた際に、実際に写本を見る機会に恵まれたが、小さいサイズの写本に小さい文字で丁寧に書かれているという印象を持った (写

⁸ No.38 Sarvatathāgatatattvasaṃgraha, Original No.27, List No. Tucci sscr 13. “The fragment, which reproduces the leaves 10-19 of the original MS, comprises the text between st. 2723 and st.2960” (SFERRA 2008: 64, note 157). No.53 Sarvatathāgatatattvasaṃgraha, Original No. L.IV.18/II, FGT W1 65. “This codex is an apograph of MS Kaiser 143, NGMPP C14/20, which has been published in facsimile by Chandra and Snellgrove (1981), and which was the basis of the editions by Yamada (1981) and Horiuchi (1983). On the cover this Ms is labelled as “Mahasamaya Kalparaja”. The two parts of the codex end in the following way: gāḍhamuṣṭinibandhāc ca mahāmudrāḥ prakalpita itī || atha vajrakulaguhyasamayamudrābandho bhavati || guhyamuṣṭisamudbhūtāḥ samayāgrah prakīrtitāḥ | (f.97r-v1); sarvatathāgataṃ guhyaṃ mahāyānābhisamgraham itī || (ornament) || idam avoca..... bhagavato bhāṣitam adhyanaḍann itī || (ornament) || (ornament) ||traṃ samāptam (fol.96v3-5)” (SFERRA 2008: 65, note 172).

真 1 を参照)。

筆者が入手済みのデジタルカラー写真に収められている写本の葉数は 152 であり、そのうち最終葉と見られる葉の表には明らかに写本の書写生とは異なる、後代の手によりマントラが書かれており、裏面には何も記されていない。また、STTS とは異なるテキストの写本 1 葉が紛れ込んでいる。したがって STTS のテキストが記してあるものは全 150 葉であり、これはスネルグローヴによる影印版のイントロダクションおよび山田校訂本のイントロダクションの記してあるものと同じである⁹。



写真 1 STTS Kaisar Library 所蔵写本

(撮影：種村隆元)

山田は、写本には 3 つの異なるフォリオ番号があり、どれも信頼できるものではないと記しているが、これについては多少なりとも注記が必要である。山田の言及する 3 つのフォリオ番号とは、1 つは左マージンにある、書写生の手になるであろう、数を表す文字で示されたもの、そして 2 つある string

⁹ 影印版にある表ではチベット語訳でのセクション番号 (bam po)、北京版のフォリオ番号、大正大蔵経でのページ番号、写本の「pagination and folio」、山田校訂本におけるページ番号が対照されている (CHANDRA and SNELLGROVE 1981: 8)。そこで示されている folio number は 1 から 150 である。また、山田校訂本ではスネルグローヴより提供された写真は全 150 コマ、282 ページ (すなわち 282 folio sides) があり、ブラフの撮影した写本により欠落している 20 ページ (すなわち 20 folio sides) が補われた旨が記されている。これは計算としては、先に筆者が言及した最終葉を加えた全 151 葉 = 302 folio sides に一致する。ただし山田は STTS のテキストが記述された全 150 葉を全体の葉数として示している。また山田は他のテキストに属する 1 葉が混入していることも指摘している (そのテキスト名は同定されていない)。しかしながら、先に注において述べたように、SNELLGROVE and CHANDRA 1981 に所収の写真のページ数はこれとは異なるものである。注 6 も参照のこと。

hole 用の余白のうち、左側の余白に書かれた数字、そして同じ余白に書かれた青いインクの数字である。しかし後二者は両方見られるフォリオがまれである。左マージンにあるオリジナルのフォリオ番号は 66 から始まり 215 まで連続して振られている。そしてこの左マージンにあるオリジナルのフォリオ番号と string hole 用の余白にある番号には一致しない場合も見受けられる。オリジナルのフォリオ番号が 66 から始まるということは、おそらくはもともとの写本は別文献(おそらくは STTS と同じく Yogatantra に属するものか?)と 1 つのバンドルを形成していたことを示唆する。先に言及した異なるテキストの記した 1 葉のフォーマットおよび書体が STTS の写本と同一であることは、この事実を支持する証拠の 1 つとなり得るであろう。

3.3 *Sarvatathāgatatattvasaṅgraha* の版本について

STTS サンスクリット語原典の版本には以下の 3 つがある。

1. 堀内寛仁『梵藏漢対照初会金剛頂経の研究—梵本校訂篇上金剛界品・降三世品』高野山・密教文化研究所, 1983 年。同『梵藏漢対照初会金剛頂経の研究—梵本校訂篇下遍調伏品・義成就品・教理分』高野山・密教文化研究所, 1974 年。
2. YAMADA, Isshi. (ed.) *Sarva-tathāgata-tattva-saṅgraha nāma mahāyāna-sūtra*. New Delhi. 1981. Śata-piṭaka Series 262.
3. CHANDRA, Lokesh. (ed.) *Sarva-tathāgata-tattva-saṅgraha : Sanskrit Text with Introduction and Illustrations of Maṇḍalas*. Delhi: Motilal Banarsidass. 1987.

現在、研究者が標準的に用いるのが 1 の堀内校訂本であろう。堀内校訂本の最大の特色は、その詳細な注記にあるといえるであろう。堀内は STTS のチベット語訳・漢訳、そしてチベット大蔵経に残されているアーナンダガルバおよびシャークヤミトラ Śākyamitra の注釈を参照して、本文のテキスト

確定にいたるまでのプロセスを記している。この注記は研究者に多大な利益を与えるものであり、堀内の研究者としての真摯な姿勢をうかがわせるものである。

しかしながら、堀内校訂本にはいくつかの問題点が残されていることも事実である。校訂本のイントロダクションの記述によると、まずトゥッチ・コレクションの apograph にもとづき校訂作業を進めていたが、入稿後にスネルグローヴ撮影の写真の利用が可能になり、Kaisar Library 写本との校合が行われている。加えてスネルグローヴ撮影の写真があまり鮮明ではないことから、本論文において校訂している箇所においても写本の文字の読み間違いがいくつかの箇所において見られる¹⁰。また、写本の読みに emendation を施している箇所があるが、その emendation に根拠に説得力を欠くものも見受けられる¹¹。

堀内校訂本に見られるこれらの欠点は、資料的な制約等によりやむを得ないものもある。現在では、堀内が校訂作業をした時代に比べて、格段に広範囲の一次文献の写本や版本の諸資料を参照できるようになっている¹²。また、技術の進歩により STTS 写本の高解像度のデジタルカラー写真が入手可能になり、スネルグローヴ撮影の写真においては不鮮明であった文字がかなりはっきりと読み取れるようになっている。また、密教と関係の深い、所謂ヒンドゥー教のタントラ、特にシヴァ教に関する研究が進み、タントラ聖典に見られる独特のサンスクリット語のスタイル (所謂 Aīśa や Ārṣa と呼ばれるもの) についての知識も蓄積されてきている。その意味において、堀内校訂本の精度をさらに高め、STTS の考察を更に進める段階に來ていると言えよう。

2 の山田校訂本は、山田がスネルグローヴの依頼をうけ、スネルグローヴ撮影の写真 (+ブラフの補充した写真) にもとづいたものである。山田は

¹⁰ 例えば、本論文セクション 4.1 の末尾の tasya khyeyam を tasya stheyam と読んでいる。

¹¹ 例えば、本論文セクション 4.1.2, verse 3 の adreśyatām を adṛśyatām と emend している。

¹² 特に、*Sarvavajrodāyā* や *Kriyāsaṃgrahapañjikā* は、STTS と密接な関係にあり、その校訂に有益である。

Kaisar Library 所蔵写本の他に、チベット語訳および 2 本の漢訳を参照している。(アーナンダガルバおよびシャークヤミトラの注釈は参照していない。) 山田校訂本には注記のないまま Kaisar Library 所蔵写本とは異なる読みを採用する箇所がしばしば見受けられるが、それが山田による emendation なのか写本の読み間違いなのか判然としない。前出の堀内校訂本と比べて、学術的信頼度に欠けることは否めない。

3 のチャンドラ本は、基本的に 2 の山田校訂本の再録であり、しかも critical apparatus のないもので、学術的には使用に耐えないものであろう。

4 Critical apparatus および略号

本論文におけるテキストおよび訳注は、Kaisar Library 所蔵写本、STTS のチベット語訳、その他関連文献にもとづいている。

本論文におけるテキストの critical apparatus およびそこで使用される記号は以下の通りである。テキストの脚注が 4 層に分かれており、それぞれの層において注記される事項と、その仕方は以下の通りである。(必ずしも各ページに 4 層すべてが現れるわけではない。) 第 1 層には STTS が引用される文献およびパラレルが見られる文献が注記される。第 2 層には、第 3 層の異読欄に記すことが困難な写本や版本に関する注記やチベット語訳に関する注記などが記される。第 3 層には写本の異読情報を記す。第 4 層には各写本のフォリオ番号を注記する。bhavanti [89v] vajranidhi とある場合は、bhavanti と vajranidhi の間にフォリオの切れ目があり、f.89v が vajranidhi から始まることを示している。

注記される箇所がある行番号の後に見出し語があり、見出し語に異読などの注記が引き続くことになる。第 3 層において、見出し語の直後に出てくる記号は、本文中で採用された読みを指示する写本の記号であり、その後にセミコロンで区切り異読を提示する。また、emendation および conjecture を支持する文献があるときは、← の記号で示す。(例: santi || em.(← *Hevajratantra*);

sati B N T)

上記写本略号以外の、本論文で使用される略号は以下の通りである。

- ac* before correction
conj. a diagnostic conjecture
D sDe dge edition
em. an emendation
n.e. not existent
Ota. D. SUZUKI (ed.) *The Tibetan Tripitaka, Peking Edition: Kept in the Library of the Otani University, Kyoto: Reprinted under the Supervision of the Otani University of Kyoto: Catalogue & Index*, Tokyo: Suzuki Research Institute, 1962. 『影印北京版西藏大藏經—大谷大学図書館蔵—大谷大学監修西藏大藏經研究会編輯総目録附索引』東京・鈴木学術財団, 1962.
P Peking edition
pc after correction
Taisho 大正新脩大藏經
Tib. Tibetan Translation
Toh. H. UI, M. SUZUKI, Y. KANAKURA and T. TADA (eds.) *A Complete Catalogue of the Tibetan Buddhist Canons*, Sendai: Tohoku Imperial University, 1934. 『西藏大藏經総目録東北大学所蔵版』仙台・東北帝国大学, 1934.
□ 写本の空白, 記号 1 つで 1 akṣara 分.
~~~~~ 写本の欠損等で失われた部分の補填

尚, テキストのセクション番号は前出のシノプシスの番号に準ずる。

## TEXT

### Vajradhātumahāmaṇḍalavidhivistara

#### 4. Siddhiniṣpattimudrājñāna

##### 4.1. Caturvidhasiddhiniṣpattimudrājñāna

tato brūyāt — kiṃ te 'bhiruciḥ, arthotpattisiddhijñānaṃ vā ṛddhisiddhiniṣpa- [H235]  
5 ttijñānaṃ vā vidyādharaśiddhiniṣpattijñānaṃ vā yāvat sarvatathāgatottamasi-  
ddhiniṣpattijñānaṃ veti. tato yasya yad abhirucitaṃ tat tasya khyeyam.

##### 4.1.1. Arthasiddhiniṣpattimudrājñāna

tato 'rthasiddhiniṣpattimudrājñānaṃ śikṣayet. [H236]

vajrabimbaṃ nidhisthaṃ tu hṛdaye paribhāvayet |  
10 bhāvayan bhūmiśaṃsthāni nidhānāni sa paśyati || 1 ||  
vajrabimbaṃ samālikhya gagane paribhāvayet |  
pated yatra tu paśyeta nidhiṃ tatra vinirdiśet || 2 ||  
vajrabimbaṃ tu jihvāyāṃ bhāvayed buddhimān naraḥ |  
atrāstīti svayaṃ vācā bravīti paramārthataḥ || 3 ||

9–10 vajrabimbaṃ ... paśyati || = *Vajraśekhara*: *rdo rje'i gzugs ni gter gnas pa || snying gar yongs su bsgom par bya || sa yi gnas kyang bsgoms na ni || gter dag rab tu mthong bar 'gyur || ba dzra ni dhi ||* (P f.213r, D f.188r).

11–12 vajrabimbaṃ ... vinirdiśet || ≈ *Vajraśekhara*: *rin chen chen po'i rdo rje gzugs || nam mkha' la ni yongs su bsgom || gang du lhung bar mthong ba ni || de nas gter yod shes par bya || ra tna ni dhi ||* (P f.213r, D f.188r).

13–14 vajrabimbaṃ ... paramārthataḥ || *pādas* ac ≈ *Vajraśekhara*: *rang gi lce la rdo rje bsgom || 'di na yod ces rang nyid smra || dha rma ni dhi ||* (P f.239v, D f.213r)

8 'rtha || Tib. support the reading *sarvārtha*: *don thams cad kyi*.

12 pated || E<sup>Y</sup> accepts the reading of MS, while saying “It appears to be patad in Ms.”

6 tasya khyeyam || MS; *tasya stheyam* E<sup>H</sup>; *tasyocyeyam* E<sup>Y</sup>. *brjod par bya'o* Tib. (which supports the reading of MS.) 8 mudrā || em. E<sup>H</sup> E<sup>Y</sup>; n.e. MS 12 pated || MS E<sup>Y</sup>; *patad* E<sup>H</sup> 14 svayaṃ || em. E<sup>H</sup> (sil.) E<sup>Y</sup> (sil.); *sveyam* MS

- 15 vajrabimbamayam sarvayam bhāvayan kāyam ātmanah |  
 samāviṣṭaḥ pated yatra nidhiṃ tatra vinirdiśed iti || 4 ||  
 tatraitāni hrdayāni bhavanti. vajranidhi. ratnanidhi. dharmanidhi. karmanidhi. [H237]

#### 4.1.2. Vajrarddhisidhiniṣpattimudrājñāna

- tato vajrarddhisidhiniṣpattimudrājñānam śikṣayet. [H238]  
 20 vajrāveśe samutpanne vajrabimbamayam jalam |  
 bhāvayan kṣipram siddhas tu jalasyopari caṃkramet || 1 ||  
 tathaiṣāveśam utpādyā yad rūpaṃ svayam ātmānaḥ |  
 bhāvayan bhavate tat tu buddharūpam api svayam || 2 ||  
 tathaiṣāviṣṭam ātmānam ākāśo 'ham iti svayam |  
 25 bhāvayan yāvad iccheta tāvad adreṣyatām vrajet || 3 ||

15–16 vajrabimbamayam ... vinirdiśed ||  $\simeq$  *Vajrasekhara*: *lus kun rnal 'byor chen po yis || rdo rje'i gzugs su rnam par bsgom || kun tu babs nas gar lung ba || de na gter yod bstan pa yin || ka rma ni dhi ||* (P f.213r, D f.188r).

20–21 vajrāveśe ... caṃkramet ||  $\simeq$  *Vajrasekhara*: *rdo rje dbab pa 'byung ba yin || chu ni rdo rje'i gzugs rang bzhin || sgom zhing rdo rje'i shugs kyis ni || chu yi steng du 'gro bar bya || ba dzra dza la ||* (P f.213r, D f.188v).

17 vajranidhi. ratnanidhi. dharmanidhi. karmanidhi || P; *om ba dzra ni dhī | om ra tna ni dhī | om dha rmma nidhī | om ka rmma ni dhī | D*

21 bhāvayet kṣipram siddhas || Perhaps MS reads *bhāvaya [kṣipram si]ddhas*. E<sup>H</sup>'s restoration is *bhāvayet kṣipram siddhas*. E<sup>Y</sup>'s restoration is *bhāvayañ chīghram siddhas*.

25 adreṣyatām || E<sup>H</sup> emends *adreṣyatām* to *adrṣyatām*. Note that E<sup>H</sup> accepts the reading *adreṣya-* in other two places. See STTS 1555: *ākāśe vānyadeśe vā bhāvayan padmam uttamam | yadā paṣyet tadā gr̥ṇa kāmāyād adreṣyatām vrajet ||*, and STTS 1735: *ākāśe vānyadeśe vā padmabimbaṃ tu bhāvayet | dr̥ṣtvā tu bhuktṃ tat padmam adreṣyo bhavati kṣaṇāt ||*.

15 bhāvayan || em. E<sup>H</sup>; *bhāvayaṃ* MS E<sup>Y</sup> 22 utpādyā || em. E<sup>H</sup> (sil.); *utpadya* MS E<sup>Y</sup> 22 yad rūpaṃ || em. E<sup>H</sup> E<sup>Y</sup> (sil.) (←Tib.: *gang gi gzugs su*); *sadrūpaṃ* MS 23 bhāvayan || em. E<sup>H</sup>; *bhāvayaṃ* MS E<sup>Y</sup> 24 ākāśo || em. E<sup>H</sup> (sil.) E<sup>Y</sup> (sil.); *ākāso* MS 25 adreṣyatām || MS E<sup>Y</sup>; *adrṣyatām* E<sup>H</sup>

17 bhavanti [89v1] vajranidhi

vajrāviṣṭaḥ svayaṃ bhūtvā vajro 'ham iti bhāvayan |  
yāvad āruhate sthānaṃ tāvad ākāśago bhaved iti || 4 ||  
tatraitāni hr̥dayāni bhavanti. vajrajala. vajrarūpa. vajrākāśa. vajra-m-aham. [H239]

#### 4.1.3. Vajravidyādharaśiddhinaṣpattimudrājñāna

- 30 tato vajravidyādharaśiddhinaṣpattimudrājñānaṃ śikṣayet. [H240]  
candrabimbaṃ samālikhya nabhasy ūrdhvaṃ samāruhet |  
pāṇau prabhāvayan vajraṃ vajravidyādharo bhavet || 1 ||  
candrabimbaṃ samāruhya vajraratnaṃ prabhāvayet |  
yāvad icchati śuddhātmā tāvad utpatati kṣaṇāt || 2 ||  
35 candrabimbābhirūḍhas tu vajrapadmaṃ kare sthitam | [H241]  
bhāvayan vajranetraṃ tu dadyād vidyādhṛtāṃ padam || 3 ||  
candramaṇḍalamadhyasthaḥ karmavajraṃ tu bhāvayet |  
vajraśīsvadharāc chīghraṃ sarvavidyādharo bhaved iti || 4 ||

26–27 vajrāviṣṭaḥ ... bhaved ||  $\simeq$  *Vajraśekhara*: rdo rje'i skas la 'dug nas ni || 'dzeg pa ru ni bsgom byas na || ji srid du ni 'dzeg pa'i gnas || de srid nam mkhar 'gro bar 'gyur || ba dzra ma ham || (P f.213r, D f.188v); *Vajraśekhara*: rdo rje'i skas ni nam mkha' la || bsgom zhing steng du 'dzeg byas na || ji srid du ni 'dzeg pa'i gnas || de srid mkha' la 'gro bar 'gyur || ba dzra ma hā || (P f.239v, D f.213r)

31–32 candrabimbaṃ ... bhavet ||  $\simeq$  *Vajraśekhara*: zla ba'i gzugs la 'dug nas su || rdo rje sems dpa' rnam par bsgom || lag na rdo rje bsgoms na ni || rdo rje rig pa 'dzin par 'gyur || ba dzra dha ra || (P f.213v, D f.188v).

33–34 candrabimbaṃ ... kṣaṇāt ||  $\simeq$  *Vajraśekhara*: zla ba'i gzugs la 'dug nas ni || rdo rje rin chen bdag rang nyid || rab tu rin chen bsgoms nas ni || rin chen rig pa 'dzin par 'gyur || ra tna dha ra || (P f.213v, D f.188v).

28 vajrajala || P; *ba dzra dzwa la* D

28 vajrarūpa || D; *ba dzra ru pa* P

28 vajra-m-aham || E<sup>Y</sup> reads *vajra-maḥam*, which seems implausible since we see the expression *vajro 'ham iti bhāvayan* in the preceding verse.

31 nabhasy ūrdhvaṃ || MS E<sup>Y</sup>; *nabhaṃ mūrḍhaṃ* E<sup>H</sup> 32 prabhāvayan || em. E<sup>H</sup>; *prabhāvayaṃ* MS E<sup>Y</sup> 35 candrabimbābhirūḍhas || MS E<sup>Y</sup>; *candrabimbāni rūḍhas* E<sup>H</sup> 37 karmavajraṃ || MS E<sup>H</sup>; *karmajrām* E<sup>Y</sup> (which says “sic. Read karmavajraṃ.”)

atha hr̥dayāni bhavanti. vajradhara. ratnadhara. padmadhara. karmadhara.

40 **4.1.4. Sarvatathāgatottamasiddhiniṣpattimudrājñāna**

tataḥ sarvatathāgatottamasiddhiniṣpattimudrājñānaṃ śikṣayet.

[H242]

sarvavajrasamādhiṃ tu saṃcintyākāśadhātuṣu |

yāvad icchati vajrātmā tāvad utpatati kṣaṇāt || 1 ||

sarvaśuddhasamādhiṃ tu bhāvayann uttamāṃs tathā |

45 pañcābhijñān avāpnoti śīghrajñānaprasādhakaḥ || 2 ||

vajrasattvamayaṃ sarvam ākāśam iti saṃsphaṛan |

[H243]

dr̥ḍhānusmṛtimāñ chīghraṃ bhaved vajradharaḥ svayam || 3 ||

buddhabimbamayaṃ sarvam adhimucya khadhātuṣu |

sarvabuddhasamādhis tu buddhatvāya bhaviṣyatīti || 4 ||

42–43 sarvavajrasamādhiṃ ... kṣaṇāt || ≈ Vajraśekhara: *phyag rgya kun gyi ting nge 'dzin || nam mkha'i dbyings su kun bsams nas || rdo rje'i bdag nyid ji srid 'dod || de srid skad cig gis 'phar 'gyur || ba dzra |* (P f.213v, D f.188v)

44–45 sarvaśuddhasamādhiṃ ... jñānaprasādhakaḥ ≈ Vajraśekhara: *ngos grub kyi ni ting 'dzin ni || nam mkha'i dbyings su kun bsams nas || mngon par shes pa lnga thob cing || myur du ye shes rang grub 'gyur || shu ddha | shu ddha |* (P f.213v, D f.188v)

46–47 vajrasattvamayaṃ ... svayam || ≈ Vajraśekhara: *rin chen rdo rje'i rang bzhin kun || nam mkha'i dbyings su kun bsams nas || rjes su dran pa bstan pa yin || myur du rin chen 'dzin mtshungs 'gyur || ba dzra | ba dzra |* (P f.213v, D f.189r)

48–49 buddhabimbamayaṃ ... bhaviṣyatīti || = Vajraśekhara: *thams cad sangs rgyas gzugs rang bzhin || nam mkha'i dbyings su mos byas nas || sangs rgyas kun gyi ting 'dzin ni || sangs rgyas nyid kyi ched du 'gyur || bu ddha bu ddha |* (P f.213v, D f.189r)

43 utpatati || E<sup>Y</sup> accepts the reading *utpatati*, but report the reading of the MS as *utpati*.

46 saṃsphaṛan || Tib. reads *dran byas na*, which can be reconstructed as *saṃsmaran*.

42 saṃcintyā° || MS E<sup>H</sup>; *saṃviṣṭvā* E<sup>Y</sup> 45 śīghra° || MS; *śīghra[m]* E<sup>H</sup>; *śīghraṃ* em. E<sup>Y</sup> 46 sarvam || MS E<sup>H</sup>; *sarva* E<sup>Y</sup> 46 saṃsphaṛan || MS<sup>Pc</sup> E<sup>Y</sup>; *sphaṛan* MS<sup>ac</sup>; *saṃsmaran* em. E<sup>H</sup>; (E<sup>H</sup> reports *saṃsphaṛan* as the reading of the MS.) 47 dr̥ḍhānusmṛtimāñ chīghraṃ || em. E<sup>Y</sup>; *dr̥ḍhānusmṛtimāñ cchaghraṃ* MS (Most probably a corruption of *dr̥ḍhānusmṛtimāñ chīghraṃ*); *dr̥ḍhānusmṛtimāñ śīghraṃ* E<sup>H</sup>. E<sup>Y</sup> reports the reading of the MS, saying “Appears like -ānusmṛtimāñ chīghraṃ in Ms.” 49 °samādhis tu || MS; *sarvabuddhasamādhiṃ* tu E<sup>H</sup>; *sarvabuddhasamādhiṣu* E<sup>Y</sup>

- 50 athātra hṛdayāni bhavanti. vajra vajra. śuddha śuddha. sattva sattva. buddha [H244]  
buddha. sarvasiddhijñānaniṣpattayaḥ.

#### 4.2. \*Rahasyamudrājñāna, \*Rahasyamudrāguhyasādhana

atha rahasyadhāraṇakṣamo bhavati, tasya prathamam tāvac chapathahṛdayam [H245]  
brūyāt.

- 55 om vajrasattvaḥ svayaṁ te 'dya hṛdaye samavasthito nirbhidyā  
tatkṣaṇam yāyād yadi brūyā-d-idaṁ nayam.  
tata evaṁ vadet. [H246]

na tvayedam śapathahṛdayam atikramitavyam. mā te viṣamāpari-  
hāreṇākālamaraṇam syāt. anenaiva kāyena narakapatanam.

- 60 tato rahasyamudrājñānam śikṣayet. [H247]

vajrāveśam samutpādyā tālam dadyāt samāhitaḥ |  
vajrāñjalitaliḥ sūkṣmam parvato 'pi vaśam nayet || 1 ||

vajratālamudrā.

- vajrāveśavidhiṁ yojya vajrabandhatalair hanet |  
65 sūkṣmatālaprayogeṇa parvato 'pi samāviśet || 2 ||  
tathaivāveśavidhinā vajrabandhaprasārite |  
agrāṅgulisamāśphoṭād dhanet kulaśataṁ kṣaṇāt || 3 ||  
sūkṣmāveśavidher yogāt sarvāṅgulisamāhitam |  
vajrabandhavinirmuktaṁ sarvaduḥkhaḥaram param iti || 4 ||

- 70 athāsām guhyasādhanaṁ bhavati. [H248]  
bhagena praviśet kāyaṁ striyāyāḥ puruṣasya vā |  
praviṣṭvā manasā sarvaṁ tasya kāyaṁ samaṁ sphared iti || 5 ||

56 tatkṣaṇam || E<sup>H</sup> reads *tat kṣaṇam*.

53 prathamam tāvac || em. E<sup>H</sup> (sil.) E<sup>Y</sup> (sil.); *prathamattāvac* MS 58 śapathāhṛdayam || em. E<sup>Y</sup> (sil.); *śapathāhṛdayam* MS E<sup>H</sup> 62 nayet || MS E<sup>Y</sup>; *nyaset* E<sup>H</sup>

50 bhavanti || [90r1] vajravajra



tatraitāni tālahṛdayāni bhavanti. vajravaśa. vajraviśa. vajrahana. vajrahara.

[H249]

## 和訳

### 4. 成就が生じるための印に関する智

#### 4.1. 四種類の成就を生じるための印に関する智

次に [阿闍梨は、マンドラに入った弟子に以下のように] 言うべきである。  
「汝にとって喜ばしいもの [=望んでいるもの] は、(1) 財宝の生起が成就するための智か、(2) 超自然的な力の成就の完成のための智か、(3) 持明者の成就の完成のための智か、あるいは (4) すべての如来の最上の成就の完成のための智のいずれか？」次にその [弟子] にとって喜ばしいものが彼 [=弟子] により語られるべきである。

##### 4.1.1. 財宝の成就が生じるための印に関する智

次に、[阿闍梨は] 財宝の成就が生じるための印に関する智を [以下のように] 教授するべきである。

1. 宝庫のある場所を金剛杵の映像として心臓に観想するべきである。[宝庫のある場所を] 修習するならば、[その] 土地に存在する宝庫を発見するであろう<sup>13</sup>。

---

<sup>13</sup> critical apparatus に示しているように、本偈頌と同じものが *Vajraśekhara* にも見られる。また、類似の実践が当該經典の別の箇所にも説かれている。 *Vajraśekhara*: gang na gter ni yod re ba || der ni skyil mo krung bcas te || snying gar rdo rje bsgoms na ni || gter gyi gnas

---

73 vajravaśa || ba dzra pā sha P; ba dzra bā sha D. The readings of Tib. are reported by E<sup>H</sup>. E<sup>Y</sup> says “ch2 & T suggest VAJRĀVEŚA”.

73 vajraviśa || ba dzra a be sha P; ba dzra ā be sha D

---

73 vajravaśa || MS<sup>pc</sup> E<sup>H</sup> E<sup>Y</sup>; vajraviśa MS<sup>ac</sup>

2. 金剛杵の映像を [観想上で] 描き、虚空に観想するべきである。[その] 金剛杵の落ちるのが見えた場所に宝庫を予知するべきである<sup>14</sup>。
3. 智慧ある人 [= 実践者] は、金剛杵の映像を舌の上に観想するべきである。[そのようにすれば] 「[財宝は] ここにある」と自らの言葉で、最高の真実から語ることになる<sup>15</sup>。
4. 憑依の状態に入り、自らの体全体が金剛の映像より成ると観想し、[観想した金剛杵が] 落ちた場所に宝庫 [があると] 予知するべきである<sup>16</sup>。

*ni rab mthong 'gyur || ba dzra ni dhi* | (P f.239v, D f.213r). 【和訳】「宝庫があると期待される場所で結跏趺坐をし、心臓に金剛杵を観想するならば、宝庫の場所が見えるであろう。[その場合の心真言は]「金剛宝庫よ！」である。」

- <sup>14</sup> critical apparatus にあるように、類似の偈頌が *Vajrasekhara* に見られる。下線部は、対応する STTS の偈頌とは異なる読みを支持する箇所である。

*Vajrasekhara* には別の箇所にも類似の儀礼が説かれている。 *Vajrasekhara: nam mkhar rdo rje bsgom bya zhing || me long la ni yang dag blta || gang du lung bar mthong 'gyur ba || de ni gter ni yod par bstan || ra ma ni dhi* | (P f.239v, D f.213r). 【和訳】「虚空に金剛杵を観想し、鏡をみるべきである。[鏡の中に映る] 金剛杵が落ちる場所に宝庫があると予知するべきである。」鏡を使うところから、これは *prasenā* の一つであると考えられる。

- <sup>15</sup> critical apparatus に示してあるように、*Vajrasekhara* 後編第 1 章に第 1 パーダ、第 3 パーダと類似の読みを支持する箇所がある。また、同経典の前編第 3 章にも類似の儀礼が説かれている。 *Vajrasekhara: lce la pa dma'i gzugs dag ni || shin tu mnyam par bzhas pas bsgom || de na yod ces bcas nas ni || rdo rje'i lce nyid rang nyid smra || dha rma ni dhi ||* (P f.213r, D f.188r). 【和訳】「尊格と」完全に合一し (*shin tu mnyam par bzhas pas*, \**susamāhita*)、舌の上に蓮華の姿を観想し、「そこに存在する」と金剛の舌で (?) 自ら語るべきである。」

- <sup>16</sup> critical apparatus に示しているように、*Vajrasekhara* 前編第 3 章にほぼ同様の偈頌が説かれている。下線部が STTS の偈頌と異なる読みを支持していると考えられる箇所である。

また、同経典後編第 1 章に、同じ心真言 (*karmanidhi*) を使用した儀礼が簡略に説かれている。 *Vajrasekhara: rdo rje las ni yang dag babs || gang du babs pa der bstan to || ka rma ni dhi* | (P f.239v, D f.213r). 【和訳】「金剛業に憑依された [状態で]、[観想された金剛杵が (?) 落ちた場所に [宝庫があると] 予知するべきである。」上の引用では *babs* という語が 2 度使用されているが、STTS の対応偈頌および critical apparatus に示されている同経典の類似偈頌を参照するならば、最初の *babs* が動詞 *āvis* あるいはその派生語の訳語として、後者の *babs* が動詞 *pat* の訳語として使用されていると考えてよいであろう。

それら [の 4 つの実践] に関して, [それぞれ] 以下の心 [真言] がある. 「金剛の宝庫よ!」「宝の宝庫よ!」「法の宝庫よ!」「行為の宝庫よ!」

#### 4.1.2. 金剛神通の成就を生じる印に関する智

次に, [阿闍梨は] 金剛神通の成就を生じる印に関する智を [以下のように] 教授すべきである.

1. 金剛の憑依が生じたら, 水を金剛の映像より成る<sup>17</sup>と観想すべきである. [そのようにすれば, ] すみやかに成就し, 水の上を動き回れるであろう<sup>18</sup>.
2. まったく同様に憑依を引き起こし, 自らがある [尊格の] 姿をとると自ら観想するならば, 自ら仏陀の姿にさえもなるのである<sup>19</sup>.

<sup>17</sup> チベット語訳は vajrabimbamayam を chu la rdo rje'i dbyibs 'dra bar 「水に [映った] 金剛杵の映像に似ていると」 と訳している (P f.31v5-6, D f.29r2). 注 28 も参照のこと.

<sup>18</sup> critical apparatus に示しているように, 類似の偈頌が *Vajraśekhara* 前編第 3 章に説かれている. 下線部の語句は STTS の対応偈頌と異なる読みを支持していると思われる箇所である. ただし, rdo rje shugs kyis (\*vajravegena) が STTS の当該偈頌にある kṣipram の意識である可能性は捨てきれないであろう.

同じ心身言 (vajrajala) を使用する類似の実践は, 同経典の後編第 1 章にも説かれている. *Vajraśekhara*: chu ni rdo rje'i rang bzhin mthong || shin tu mnyam gzhaḡ dga' bar 'gyur || chu ni stug po'i rang bzhin mthong || chu yi steng du bcag par 'gyur || ba dzra dza la | (P f.239v, D f.213r). 【和訳】「水が金剛から成ると観想し, [尊格と] 完全に合一し, 歓喜する. そして水が高密度のものから成る [=非常に堅い] と観想するならば, 水の上を歩き回ることができる. [心真言は] 「金剛の水よ!」 [である].」

<sup>19</sup> STTS 当該偈頌の実践の心真言 (vajrarūpa) を使用する類似の実践が, *Vajraśekhara* 前編第 3 章, 後編第 1 章にそれぞれ説かれている. *Vajraśekhara*: ji ltar 'dod pa'i gzugs su ni || rdo rje sems sogs 'dod pa rnams || rang bdag nyid ni bsgom bya ste || 'dod pa'i gzugs nyid thob par 'gyur || ba dzra rū pa | (P f.213r, D f.188v). 【和訳】「自分自身を望むような姿として, [たとえその] 望まれたものが金剛薩埵望など [の尊格だとしても], 観想するならば, その望む通りの姿を獲得するであろう. 金剛の姿よ!」 *Vajraśekhara*: bdag nyid ting 'dzin dang ldan pas || yang dang yang du dga' bar bya || bdag nyid dga' ba'i gzugs su ni || bsgom na de dang 'dra bar 'gyur || ba dzra rū pa | (P f.239v, D f.213r) 【和訳】「自分自身

3. まったく同様憑依された自分自身を、「私は虚空である」と自ら観想するならば、望む間[自らの姿が他人から]見られないようになるであろう<sup>20</sup>。
4. 自ら金剛が憑依した状態になり、「私は金剛である」と観想するならば、[自らの望む]場所に登る間虚空に留まることになる<sup>21</sup>。

それら[の4つの実践]に関して、[それぞれ]以下の心[真言]がある。「金剛の水よ!」「金剛の姿よ!」「金剛の虚空よ!」「私は金剛である!」

#### 4.1.3. 金剛持明者の成就を生じる印に関する智

次に、[阿闍梨は]金剛持明者の成就を生じる印に関する智を[以下のように]教授するべきである。

1. 月の映像を[観想上で]描き、空中高く上昇するべきである。  
手のひらに金剛杵を観想するならば、金剛持明者となるであらう

---

との三昧により(?)何度も何度も喜ばし、自分自身を喜んだ姿として観想するならば、それと同じようになるであろう。金剛の姿よ!」

<sup>20</sup> STTS 当該偈頌の実践の心真言(vajrākāśa)を使用する類似の実践が、*Vajraśekhara* 前編第3章、後編第1章にそれぞれ説かれている。*Vajraśekhara*: *chos kun mkha' dang mtshungs pa ste || bdag nyid nam mkha' zhes rang nyid || de nyid dag pa bsgom bya ste || de ni mi snang ba nyid 'gyur || ba dzra ā kā sha ||* (P f.213r, D f.188v)。【和訳】「すべての法を虚空に等しいと」[観想し]、自分が虚空であると[自ら観想し]、それ自身(?)が浄化されていると観想するならば、姿が見られることはないであろう。金剛の虚空よ!」*Vajraśekhara*: *bdag nyid nam mkha'i rang bzhin mtshungs || rang bzhin med pa nyid bsgoms shing || rdo rje dbab pa bskyed byas na || myur du mi snang ba nyid 'gyur || ba dzra ā kā sha ||* (P f.239v, D f.213r)。【和訳】「自分自身が虚空の自性と等しく、[それ故に]無自性であると観想し、金剛憑依を引き起こすならば、すぐに姿が見られなくなるであろう。金剛の虚空よ!」

<sup>21</sup> critical apparatus に示しているように、類似の偈頌が *Vajraśekhara* 前編第3章、後編第1章にそれぞれ説かれている。下線部が STTS と異なる読みを支持していると考えられる箇所である。rdo rje'i skas la 'dug nas ni || 'dzeg pa ru ni bsgom byas na 「金剛の階段にあつて、[そこを]登ると観想するならば」、rdo rje'i skas ni nam mkha' la || bsgom zhing steng du 'dzeg byas na 「金剛の階段を虚空に観想し、[そこを]登るならば」。

う<sup>22</sup>.

2. [観想で描いた] 月の映像に乗り、自らを金剛宝を持つ者として観想すべきである。[そのようにして] 自身が浄化された者は、望む限り、一瞬にして [虚空に] 上昇することになる<sup>23</sup>。

3. 一方、[観想された] 月の映像に乗り、掌中にある金剛蓮華を金剛眼として観想するならば、[仏は?] 持明者の境地を与えることになろう<sup>24</sup>。

4. [観想された] 月輪の中にあつて、羯磨金剛杵 (karmavajram)

<sup>22</sup> critical apparatus に示しているように、類似の偈頌が *Vajraśekhara* 前編第 3 章に説かれている。下線部が STTS と異なる読みを支持していると考えられる箇所である。(*zla ba'i gzugs la 'dug nas su || rdo rje sems dpa' rnam par bsgom ||* 「月の姿 [= 月輪] の上にあつて、金剛薩埵を観想するならば」)

また、同経典の後編第 1 章にも類似の実践が説かれている。 *Vajraśekhara*: *zla ba'i dkyil 'khor dbus gnas shing || nam mkha' la ni bdag nyid gnas || lag na rdo rje dang ldan par || bdag nyid yongs su bsgom par bya || rdo rje rig pa 'dzin par 'gyur ||* (P f.239v, D f.213r)。【和訳】「月輪の中にあつて、虚空に自らあり、手に金剛杵を持つと自ら観想するべきである。[そうすれば、] 金剛持明者となるであろう。」

<sup>23</sup> critical apparatus に示しているように、類似の偈頌が *Vajraśekhara* 前編第 3 章に説かれている。下線部が STTS と異なる読みを支持していると考えられる箇所である。

また、類似の実践が、同経典の後編第 1 章に説かれている。 *Vajraśekhara*: *bdag nyid rdo rje rin chen dang || de bzhin du ni bdag nyid gnas || lag tu rin chen rnams bsgoms na || rin chen rig pa 'dzin par 'gyur ||* (P f.240r, D f.213v) 【和訳】「自らが金剛宝であると [観想し]、自分自身が同様な状態 [となり][= 手に金剛宝を持つこと?]、手に諸々の宝を観想するならば、宝持明者となるであろう。」

<sup>24</sup> *Vajraśekhara* 前編第 3 章および後編第 1 章に類似の実践が説かれている。 *Vajraśekhara*: *zla ba'i gzugs la 'dug nas su || rdo rje 'dzin pa rang bdag nyid || lag pa pa dma dag tu bsgom || pa dmo'i rig pa 'dzin par 'gyur || pa dma dha ra ||* (P f.213v, D f.188v)。【和訳】「蓮華の姿の上にあつて、自分自身が持金剛者であり、清浄なる蓮華を手にする者として観想するならば、蓮華持明者となるであろう。蓮華を持つ者よ!」 *Vajraśekhara*: *gal te chos kyi phyag rgya 'dod || gnas sam yang na gzhan yang rung || bdag nyid gnas par bsgom na ni || de ltar gnas shing lag pa ru || rdo rje padma rab bsgom zhing || bdag nyid rdo rje chos su te || padma rig pa 'dzin par 'gyur ||* (P f.239r, D f.213r) 【和訳】「もし法印を望み、[そのような] 状態、あるいは他のふさわしい状態として自分自身を観想し(??)、そのようにあつて、手に金剛蓮華を、そして自分自身を金剛法として観想するならば、蓮華を持つ者となるであろう。」

を觀想するべきである。二重金剛杵 [=羯磨金剛杵](vajraśiśva-) を保持することで、迅速に羯磨金剛杵 (-viśva-) の持明者となるであろう<sup>25</sup>。

次に、[上の4つの実践における] 心 [真言] は以下の通りである。「持金剛よ!」「宝を持つ者よ!」「蓮華を持つ者よ!」「羯磨金剛杵を持つ者よ!」

#### 4.1.4. すべての如来の最上の成就を生み出す印に関する智

次に、すべての如来の最上の成就を生み出す印に関する智を教授するべきである。

1. 虚空界において、すべての金剛の三昧を觀想し、金剛を自性とする者となった者は、望む限り一瞬間に [虚空に] 上昇することになる<sup>26</sup>。
2. すべての浄化されたものの三昧を觀想するならば、智慧を成

<sup>25</sup> *Vajraśekhara* 前編第3章および後編第1章に類似の実践が説かれている。*Vajraśekhara*: *zla ba'i gzugs la 'dug nas su || rdo rje'i las su yang dag brtan || lag tu las ni bsgom byas na || las kyi rig pa 'dzin par 'gyur || ka rma dha ra |* (P f.213v, D f.188v). 【和訳】「月の姿の上であって、金剛業 (羯磨金剛杵?) を觀想し (? yang dag brtan は corruption か)、手に羯磨金剛杵 [=二重金剛杵] を觀想するならば、羯磨金剛杵の持明者となるであろう。*Vajraśekhara*: *zla ba'i dkyil 'khor la 'dug ste || bdag nyid las dang yang dag ldan || nam mkha' la gnas bdag nyid ni || las kyi rig pa 'dzin par 'gyur ||* (P f.240r, D f.213v). 【和訳】「月輪の上であって、自ら羯磨金剛杵 [=二重金剛杵] を持ち、自ら虚空にいる [觀想するならば]、羯磨金剛杵の持明者となるであろう。[この場合の心真言は]「羯磨金剛杵を持つ者よ!」である。」

<sup>26</sup> critical apparatus にあるように、類似の偈頌が *Vajraśekhara* 前編第3章に説かれている。また、同じ心真言を使用する実践が同経典の後編第1章に説かれている。*Vajraśekhara*: *stong gsum gyi ni 'jig rten 'di || thams cad rdo rje'i rang bzhin bstan || rdo rje'i bdag nyid ji srid 'dod || de srid skad cig gis 'phar 'gyur || ba dzra ba dzra |* (P f.240r, D f.213v) 【和訳】「三千世界のすべてが金剛を自性として」と説き (?), [実践者が] 金剛を自性とすることを望んだ瞬間、[空中に] 浮遊するであろう。[この場合の心真言は]「金剛よ! 金剛よ!」である。」

就させる者は、最上の五神通を迅速に獲得するであろう<sup>27</sup>。

3. すべての虚空が金剛薩埵より成る<sup>28</sup>と拡散 [のヨーガ] を行うならば、[実践者は] 堅固な念想を有し、迅速に自ら持金剛となるであろう<sup>29</sup>。

4. 虚空界においてすべてが仏の影像からなると強く確信するならば、すべての仏の三昧が [実践者を] 仏位へと導くであろう<sup>30</sup>。

次に、これら [4 つの実践] に関して、以下の心 [真言] がある。「金剛よ！金剛よ！」「浄化されたものよ！浄化されたものよ！」「存在よ！存在よ！」「仏よ！仏よ！」

[以上、] すべての成就の智の完成である。

<sup>27</sup> critical apparatus にあるように、後半が同じ読みを支持する偈頌が *Vajraśekhara* 前編第 3 章に見られる。また、同じ心真言を使用する類似の儀礼が同經典後半第 1 章に説かれている。*Vajraśekhara*: *chos kyi dbyings kyi rang bzhin dag || yan lag padma dang ldan zhing || bdag nyid dag par rab bsgoms na || mngon par shes pa lnga thob 'gyur || shu ddha shu ddha* | (P f.240r, D f.213v) 【和訳】「法界の自性とし、手に (yan lag) 蓮華を持ち、自身が清浄であると観想するならば、五神通を得るであろう。[この場合の心真言は]「浄化されたものよ！浄化されたものよ！」である。」

<sup>28</sup> Skt. vajrasattvamayam. Tib. はこの箇所を *rdo rje sems dpa' dra bar* と訳している (P f.32r5–6, D f.29v1). 注 17 も参照のこと。

<sup>29</sup> critical apparatus にあるように、類似の偈頌が *Vajraśekhara* 前編第 3 章に説かれている。ただし、*Vajraśekhara* に説かれる心身言は STTS のそれとは異なっている。また、*Vajraśekhara* 後編第 1 章にも類似の儀礼が説かれている。*Vajraśekhara*: *nyin mtshan brtson 'grus dang bcas pas || rdo rje sems dpa' nam mkha' yi || dbyings su bzhugs par bsams na ni || rang nyid rdo rje 'dzin par 'gyur ||* (P f.240r, D f.213v) 【和訳】「昼夜努力をして、金剛薩埵が虚空にいと観想するならば、自分自身が持金剛となるであろう。」

<sup>30</sup> critical apparatus にあるように、同様の偈頌が *Vajraśekhara* 前編第 3 章に見いだされる。また、類似の実践を説く偈頌が同經典の後編第 1 章にも見いだされる。*Vajraśekhara*: *kham s gsum 'di dag thams cad ni || sangs rgyas gzugs su mos byas nas || brtan par rjes su dran grub na || sangs rgyas nyid du 'gyur ba yin ||* (P f.240r, D f.213v) 【和訳】「この三界すべてを仏の姿であると確信して、[それに対して] 堅固な念想が生じるならば、仏の位がもたらされるであろう。」

## 4.2. 秘密の印および成就法

次に、秘密を保つことのできる [弟子が] いたならば、その者に対してまず最初に、呪詛の心髓を唱えるべきである。

オーン。もし汝がこの実践体系を [未入門者に] 語るならば<sup>31</sup>、今汝の心臓に自らいる金剛薩埵が、その瞬間に [心臓を] 破り去るであろう。

次に阿闍梨は以下のように告げるべきである。

汝はこの呪詛の心髓を違反してはいけない。汝が危険を招く行為を回避せず死ぬようなことがないように、[もしそのようになれば、] その身のまま地獄に落ちることになる。

次に秘密印の智を教授するべきである。

1. 尊格と合一した [実践者] は、金剛憑依を引き起こし、金剛合掌した掌で静かに拍掌を行えば、山さえも意のままになる。

[以上が] 拍掌の印である。

2. 金剛憑依の儀軌を適用し、金剛縛の拍掌を行うべきである。微細な拍掌を用いることにより、山さえも憑依するであろう。

3. 全く同様に憑依の儀軌に従い、金剛縛を広げるならば、指の先端を弾くことにより、その瞬間に百部族も打ち倒すことができるであろう。

4. 微細な憑依の儀軌を適用して、すべての指をしっかりと組み、[そのようにして結んだ] 金剛縛 [の指] を解くならば、それ

---

<sup>31</sup> 動詞 *bhrū* の主語は二人称なので、*bhrūyād* の末尾の *d* は *hiatus breaker* と考えるべきであろう。



はすべての苦を払う最高のものである。

次にこれらの印の秘密の成就法がある。

5. 女陰を通して女性の身体に、あるいは [男根を通して?] 男性の身体に入るべきである。観想上で入ったならば、その身体に等しく遍満するべきである。

それに関して、以下の拍掌の心髄がある。「金剛制御よ!」「金剛入よ!」「金剛破壊よ!」「金剛払よ!」

## 参考文献

### 1. 一次資料

#### a. サンスクリット語文献

*Sarvatathāgatatattvasaṃgraha* (= STTS). MS = Manuscript preserved in Kaiser Library, Kathmandu. KL Acc. No. 143, KLD No. 108. E<sup>H</sup> = 堀内寛仁. 1983. 『梵藏漢対照初会金剛頂経の研究：梵本校訂篇上 — 金剛界品・降三世品』高野山・密教文化研究所. E<sup>Y</sup> = YAMADA, Isshi. 1981. *Sarva-tathāgata-tattva-saṃgraha nāma mahāyāna-sūtra: A Critical Edition Based on a Sanskrit Manuscript and Chinese and Tibetan Translations*. New Delhi, 1981. Śata-piṭaka Series Volume 262.

*Sarvavajrodayā*. 密教聖典研究会. 1987 (MSK1). 「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajrodaya: 梵文テキストと和訳 (I)」『大正大学総合佛教研究所年報』8, 257(24)–224(57).

**b. チベット語文献**

*gSang ba rnal 'byor chen po'i rgyud rdo rje rtse mo*. Translation of the *Vajraśekhara Tantra*. Ota. No. 113, *rgyud*, vol.nya, ff.162v2–301v8; Toh. No. 480, *rgyud*, vol.nya, ff.142v1–274r5.

**2. 二次資料**

**a. 和文資料**

北村太道, タントラ仏教研究会. 『全訳金剛頂大秘密瑜伽タントラ』 浦安・起心書房, 2012 年.

梅尾祥雲. 1982(1935). 『秘密事相の研究』 京都・臨川書店. 梅尾祥雲全集 第 2 巻. 高野山大学出版部 1935 年刊の複製.

**欧文資料**

CHANDRA, Lokesh and David L. SNELLGROVE. 1981. *Sarva-tathāgata-tattva-saṅgraha: Facsimile Reproduction of a Tenth Century Sanskrit Manuscript from Nepal*. New Delhi, 1981. Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures, volume 239.

SANDERSON, Alexis. 2009. "The Śaiva Age: The Rise and Dominance of Śaivism During the Early Medieval Period." In: Shingo EINO (ed.) *Genesis and Development of Tantrism*. Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo, pp. 41–349. Institute of Oriental Culture Special Series 23. = 永ノ尾信悟編. 『タントラの形成と展開』 東京・山喜房仏書林, 2009.

SFERRA, Francesco. 2008. "Sanskrit Manuscripts and Photographs of Sanskrit Manuscripts in Giuseppe Tucci's Collection." In: Francesco SFERRA (ed.) *Sanskrit Texts from Giuseppe Tucci's Collection Part I*, Roma: Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente, pp. 15–78. Manuscripta Buddhica 1.

SNELLGROVE, D. L. 1959. *The Hevajra Tantra: A Critical Study, Part I, Introduction and Translation*. Oxford: Oxford University Press.

<キーワード> *Sarvatathāgatatattvasaṃgraha*, 校訂テキスト, āveśa, 憑依

本研究は JSPS 科研費 18K00063 の助成を受けたものである。

## 和文抄録

本論文は, *Sarvatathāgatatattvasaṃgraha* (『真実摂経』, 『初会金剛頂経』 以下 STTS) 第一儀軌「大乘現証 (= 金剛界品)」 「金剛界大マンドラ賞」の規定するアーヴェーシャ (憑依) 儀礼のセクションのサンスクリット語校訂テキストおよび和訳注を提示するものである。校訂テキストおよび和訳注の作成に関しては, Kaiser Library 所蔵のサンスクリット語写本, チベット語訳, その他関連諸文献を参照している。また, 併せて, Kaiser Library 所蔵写本に関する新たなる知見も提示している。